

日 時：平成 27 年 7 月 30 日（月）10 時～12 時

場 所：京都ホテルオークラ 3 階 金剛

出席者：委員名簿参照（委員 10 名中 7 名出席）

（白須産業戦略監）

- ・次第の 4 テーマについて、それぞれ 2 人の委員から提案をいただき、その後意見交換したい。
- ・今回 4 テーマの議論を行い、次回の懇談会で残り 4 テーマの議論を行う。

1. ①成長市場の獲得、新ビジネスの創出

（関根委員）

- ・京都で CCRC（Continuing Care Retirement Community）にトライアルしてはどうか。もっと学びたいシニアを京都に呼んでくるビジネスモデルになり得る。アメリカのビジネスモデルは大学が中心となっており、高齢者が大学の設備を使えると同時に、高齢者がメンターや講師になるなど若者や大学に貢献できるしくみとなっている。
- ・条例を作り、空き家となっている町家を活用して観光客が宿泊できるようにしてはどうか。世界的に話題になっている Airbnb の日本での先進事例になり得る。
- ・土地の記憶プロジェクト。リアルな景色に、その場における歴史的な CG 映像を重ね合わせ、過去の時代にワープできる仕掛けを考えてはどうか。大学、デザイナーが集積し、長い歴史を有する京都からこのようなコンテンツを発信することは世界に対するインパクトがある。

（西村委員（事務局が代読））

- ・高齢者は若い人以上に価格に敏感である。
- ・高齢者消費市場を考えるには、フローだけでなく資産の有効活用を促すサービス産業の発展が望まれる。
- ・医療・介護は公的保障が中心との前提に立って、これを補完するきめの細かいビジネス展開が必要。
- ・80 歳以上の「超」高齢者数が増え、世界で最先端となる。暮らし方のモデルとなり海外展開のひな形づくりになり得る。また介護の社会化を前提とするライフスタイルが常態化する。
- ・予防ビジネスには食生活・運動・健康補助食品を含む薬剤・医療の相互作用による統合的なケアと医師、薬剤師などの多職種の協働が不可欠である。

（自由意見交換）

- ・京都の歴史的な資産、学術的な資産を活用すれば、蓄えた資産を使ってでも趣味などを楽しみたい高齢者を域外から呼び込むことができるのではないかと。（西本委員）
- ・高さなどの制限が厳しい京都では、CCRC を行う場所の確保が問題になる可能性があるが、規制はブランド価値にもなる。（原委員）
- ・若いころ海外を飛び回っていて 60 歳を超えて若者に経験を伝える方や、リタイアする前の段階の人などから呼び込む施策が必要。（今庄委員）
- ・シニアを呼び込む取組は良いが、人生の最期まで面倒をみるというところまで考えたい。介護や医療ロボットも含めたいろいろな医療システムが生まれる新しい産業の場にもなる。（辻委員）
- ・アメリカでは 40、50 歳で Retirement Community に移り起業できる風土がある。（関根委員）
- ・CCRC の CC は「最期まで面倒みます」という意味で、医療・介護産業も必ず含まれる。亡くなった後の、墓じまいなどの静脈産業も成長している分野である。（関根委員）
- ・CCRC は必ずしも高層マンションでなくて良く、町家を集めて利用するのも良い。（関根委員）
- ・予防や介護は従前からものづくりの観点からは議論されているが、サービスの提供という点ではまだ不十分である。京都で良いモデルが作れないか。（白須産業戦略監）
- ・市民は京都の価値を漠然と認識しているが、その価値をアクティブに活用しようとする考えは乏しい。市が若者などから提案を募る場を設けると良いのではないかと。（西本委員）

- ・医・工・情報の連携でおもしろいものができると思う。(辻委員)
- ・大手企業は予防などにも注力している。それらと地元の中小、ベンチャー企業をどう結び付けられるかが課題である。(白須産業戦略監)
- ・サンディエゴは、センサーを使った医療用デバイスの開発や、ビッグデータを使った医療サービスの提供が進んでいる。中小企業や大学が多く、住みやすいサンディエゴがモデルとして参考になるのではないか。(今庄委員)
- ・町家を、飲食店だけでなく、保存の観点も含めてもっと良質の場として活用する方策を講じるべき。(西本委員)

2. ③産業連関の中でのサービス産業

(原委員)

- ・日本の産業連関表をみると、モノとサービスを分けて考えることには意味がなく、モノを使ってサービスの付加価値を高めている産業の実態が読み取れる。グッズドミナントからサービスドミナントへ向かっている中で、機能・価値を提供する手段として、モノもあればサービスもあると捉えた方が良い。
- ・京都ならではの資源をもっと活用すべき。例えば、老舗率世界一の京都のビジネスには、権威の継承と技能の継承を分けているなどビジネスを継続させるノウハウがある。
- ・観光がメジャーな伝統文化資源に依拠しすぎている。観光客の80%は高頻度リピーターで、隠れた京都の良さに価値を見出す。観光資源の間をつなぐストーリーがもっと作れるのではないかな。
- ・規制と規制緩和のメリハリをつけるべき。建物の高さ制限は、一方で景観やブランドを向上させている。これをビジネスに広げるとトータルでうまくいく。
- ・従業員の所得向上には、お客さんのサービス対価に対する認識を高めなければいけない。正しいサービス・おもてなしに対して相応の対価を払う習慣や、リテラシーを向上する教育が必要ではないか。
- ・アメリカでは賃金の上昇と多様な働き方の実現が両立しているようである。アメリカのワークスタイルと労働条件の動向をウォッチしていく必要がある。
- ・生活習慣に合わせて自ら非正規労働を選択している優秀な方もいる。「非正規雇用者」と一括りにして正規化を目指すのではなく Independent Contractor (独立した業務請負人) として認める方が、彼らの生産性向上にとって重要ではないか。
- ・教育や医療など京都には高度な専門職の方が多い。この人材プールを R&D や教育のアウトソース等の形で活用できないか。サービスを受ける側にもメリットがあり、循環ができれば職の安定にもつながる。

(各務委員)

- ・サービス産業の高付加価値化を実現するには、異業種の連携によって新業態を開発することが重要。例えば伝統的なものとデジタルテクノロジーを掛け合わせることで、世界にいままで無かった全く新しいサービスを生み出すことが、京都らしさを活かし、かつ世界のルールメイカーになるためには有効。
- ・新サービスを生み出す際に、差別化戦略では高付加価値化は難しく、京都の本質的価値に立ち返ることが大切。つまり 1200 年の歴史の中で育まれた有形無形の文化価値を、現代の文脈の中でいかにお客様に愉しく、わかり易く、でも安売りしないで提供するサービスは何かを考えることが必要。
- ・京都文化に本質的な価値を発見し異業種連携によって新サービスを生み出すには、第三者目線で連携を目利きするプロデューサーの存在が重要である。プロデューサーの育成や、連携を促す場づくり、風土づくりに行政の支援があると、新しい価値が生み出されていく。

(自由意見交換)

- ・日本酒は日本の文化そのものであり、発酵・醸造はサイエンスとしても面白い。フランスのワインのように、京都の日本酒を文化のように仕上げると良い。(辻委員)
- ・瀬祭のように、京都でもお酒をベースにしたストーリー作りにもっと取り組んだ方が良い。(原委員)
- ・産業技術研究所では、ワインに慣れた外国人を対象にした新しい日本酒を造るため、フルーティーな香りを生む酵母を開発をしている。サービス面では、英語表記の日本酒ガイドブックを作り、ガイドブックを通じて日本酒の奥深さを伝える工夫が必要。こういう地道なサービスが日本酒の生産量増加につな

がる。(西本委員)

- ・資本主義経済では、消費して新しいモノを購入するという循環を生み出すのが原則である。消費しながら循環させる仕組みに繋げるうまい演出が必要である。(西本委員)
- ・付加価値を高める必要がある一方、サービス産業には低賃金の分野も多い。(白須産業戦略監)
- ・京都特有の制約を労働者の処遇改善に活かせないか。建物の高さ制限でホテルが多く立地できないことによる高宿泊料とそれに見合う高度なサービスの提供を労働者に還元する等。(金井委員)
- ・一般的で置き換え可能なサービスは、標準化やIT化、モジュール化してできるだけリソースを活用することが必要。一方、高品質サービスは人の能力を大事にすることが必要。(原委員)
- ・京都は、本来もっと高く売れるものの価格を控えめにしている。目に見えない文化価値に対してもっと自信を持って値段をつけてはどうか。効果効率や短期的利益を重視する資本システムの代案になるサービス生態系が京都なら世界に先駆けて作れるのではないか。(各務委員)
- ・量より質を重視する京都商法という文化もあっていいのではないか。(辻委員)
- ・京都では、見えない部分を語るストーリーテラーやプロデューサーを増やすことが最も重要。京都中の良いものを一か所で味わえる場所があれば良い(日本酒など)。(関根委員)

3. ④若者の力を引き出すビジネス環境

(今庄委員)

- ・起業に関心がある若い人は多いので、京都で起業のきっかけづくりの場を提供することが必要。東京には数多くそういう場があるが、京都では少ない。
- ・東京から講師やメンターをそういう場に呼べば、京都の若者に出会いを提供できるし、お互い身近になる。東京の方もそれがきっかけで京都に拠点を置くことがあるかもしれない。
- ・弊社直接ではないがモノづくり系のベンチャーを育てることに取り組んでいる。ソフト系の方を対象にした座学や、京都試作ネットと連携して量産できるものを考えるプログラムを進めている。
- ・そういった場をたくさん作り、発信することで、世界から京都に起業を志す人が集まってくるきっかけを作ることが重要である。
- ・京都が目指すモデルとしてよくシリコンバレーが挙げられるが、むしろボストンやサンディエゴの方が参考になるのではないか。落ち着いた雰囲気でも文化的で、大学が中心になっており、ベンチャーも旺盛である。

(辻委員)

- ・京都の強みは産学連携である。市内の大学と如何に連携を深めてビジネスを生み、人材育成を進めるかを考える必要がある。
- ・中でも、京都工芸繊維大学は、工科大学の特徴を生かして、ベンチャー育成のインキュベータ機能を担っていただきたいと考えている。
- ・京都で成功した大企業の創業者は、他地域出身の方も多い。その視点で考えると、京都の若い人を育てるだけでなく、他の地域から若い起業家を呼び込むことも重要ではないか。
- ・海外人材からの人材の招へいにも可能性がある。海外には京都で起業したい方もいる。そういう方に京都の大学にインターンしてもらい、その後京都で起業してもらいたいのが良いのではないか。その際に、インターナショナルスクールのような教育機関がないのが課題である。
- ・起業資金の提供に関する制度、施策はすでにあり心配がないが、シーズが足りないという気がする。

(自由意見交換)

- ・京都には江戸時代から、外から来た若者が技術を身につけて独り立ちする流れがあった。現在においても、外から若者を呼び寄せることを真剣に考えた方が良い。外から来た大学生のダイナミックな考えを活かすなど、若者の新しいトレンドを後押しするプログラムを作れるとよいのではないか。(西本委員)
- ・京都が好きでたまらないという外国人にも京都に来てもらいたい。異能異才を惹きつける魅力を備えるとともに、同伴家族(子どもたち)のためのインターナショナルスクールなど定着を促すインフラの整備も必要。(西本委員)

- ・アメリカでは、地域の人々が教える English for second language のクラスがどこの小学校にもあった。外国人に対して Japanese for second language を教えられると、京都市も国際的なまちになれると思う。(関根委員)
- ・進学校にインターナショナル・コースを1クラス分程度設けるのはどうか。(西本委員)
- ・海外にはサバティカル制度があり、日本を訪れるニーズはあるが、対応できるインフラがない。(辻委員)
- ・京都は世界で一番サバティカルに行きたいが、一番行きにくい場所と言われている。(関根委員)
- ・シリコンバレーにも、京都ならサバティカルに行きたいという人がいる。受け入れ態勢が必要。(今庄委員)
- ・起業資金は、本当に最初の時の資金が足りていない。東京には比較的資金があるので、京都にも起業家をひきつける資金が欲しい。外から人を呼ぶためにも必要である。(今庄委員)

4. ⑥働きやすい職場環境の整備、雇用の質向上

(金井委員)

- ・中小企業の人材確保・定着支援は大変重要な課題であり、経営者に働き方の見直しの必要性を認識してもらうための啓発が必要だと思う。そのためには、具体的な見直し手法のモデルを示していくことが大事である。
- ・女性や高齢者、作業に不慣れな人等、どんな人でも働きやすくなるよう作業環境や設備等のハード面での改善も必要。改善の取組を進めやすくするインセンティブの幅を広げられればと思う。
- ・在庫調整ができないサービス業では、需要の平準化が雇用の質の向上(正規化や安定化)につながる。
- ・非正規社員の正社員化は必要だが、フルタイムで働く正社員だけでなく、短時間正社員や仕事限定正社員、地域限定正社員のモデルを示していくことが必要である。
- ・感想だが、京都の「一見さんお断り」という慣行は、取引先の確保や業務量の変動が小さいというメリットがあるため、大事にしていって良いと思う。

(西本委員)

- ・高齢になってもリタイアせず、社会貢献をしたいという人もいる。若者の雇用を圧迫しない限りは、働きたい人は雇用していくと良い。
- ・望まない非正規雇用者の正規化は非常に大事。正規雇用が必ずしもフルタイム労働ではないという選択肢が可能になるのであれば、生活スタイルを束縛されたくない者も正規職に就けるのではないかな。
- ・生活の豊かさは、収入の額の大きさだけではかされるわけではない。公共施設や交通が合理的な価格で利用できるようになれば、豊かな市民生活ができるのではないかな。税込面で制約もあるが、トータルでデザインすることが必要。
- ・中小企業が良い人材を確保するためには、女子学生に目を向けた方が良い。そのためには、女性の就労環境を整えることが必要。私の経験では、工学部には女子学生が少なかったが、能力は全体の平均よりも高かった。
- ・利益率の高さや市場独占性の観点で、外国の投資家から見て魅力的な中小企業が京都にはたくさんある。そういう中小企業へ若者に目を向けてもらい、就職してさらに盛り立てるというシナリオを描くことも必要ではないかな。

(自由意見交換)

- ・数年前は学生の働く場がなかったが、今は良い企業であってもなかなか人が採れない。金井委員からの提案は、新たな視点として産業政策に組み入れていきたい。(白須産業戦略監)
- ・目まぐるしいトレンドや消費される生活から離れ、四季を大切に家族とゆっくりすることなどの新しい豊かさを求めて京都に移り住んでくる人がいる。また普遍性を大切にする京都の哲学に惹きつけられ若者やアーティストが外から集まり、新たな生態系も生まれてきている。京都の本来的

な価値を守り進化させるためにも、そういった新しい生態系を作っていくことが大事だと思う。(各務委員)

- ・京都の大多数を占める伝統産業企業や中小企業の求人情報は学生に効率的に届いていない。マッチングする取組として、参加企業が職場をオープンにして実際に見聞きできる日を設定する方法もあると思う。(各務委員)
- ・中小企業の課題として、自社がどういう会社であるかを語り切れていないところがある。(関根委員)
- ・情報化の時代でも、学生はベンチャー企業や中小企業のことを知らない。ネットでもリアルでも、接点を提供することでマッチングが進むと思う。(今庄委員)
- ・障がい者が働きやすいように製造ラインを見直したところ、初心者、高齢者、妊産婦の方でも非常に働きやすくなった例がある。「働き方のユニバーサルデザイン」として、働きやすい場を作ることとを発信することも大事。(関根委員)
- ・製造業を営む中小企業の中でも一定規模のところでは、行政が助成して設備更新を進めることで就労環境を改善できる。家内工業的、手工業的な規模の小さい企業では、行政の助成であっても問題解決は困難であるところが悩みだ。(西本委員)

以 上